# もっぷる通信

第9号
72.4.21

日本赤色救援会
連絡先
もっぷる社
振替(東京)132972

東京都新宿区新宿二の一七
03(352)5876
大阪市北区大融寺町六五
奥田ビル二F
06(312)7734

## 家族問題に対する、我々の見解（試案）

「人質になられた方には申し訳ありません。死んでおわびできることではありませんが、死んでおわびします。あとに残った家族をどうか責めないで下さい。」

連合赤軍兵士、板東国男の父親は、こう言い残して自殺した。我々は思う、家族を悲しみと絶望のどん底におとし入れた権力のあくどい手口と、そしてそれ以上に、権力の有形無形の弾圧を向こう有効にはね返すことのできなかった我々の非力を。

今回の同志殺しは、我々に己れの病の何たるかをイヤという程、はっきりと教えた。その病の中の一つ（家族帝国主義病）について考えてみよう。これまで我々は、家族の問題を個人的な問題、プライベイトな問題として処理（実質的には切り捨て）してきた。それ故、家を出れば、なんとなく解決できたような気になり、家族帝国主義をぶち破れなどと平気で息まいてきたのである。しかし、こういう態度はプチブル的であり、一日も早く改めなければならない。桎梏になっている現実があるとしても、だからといって、即ち敵であるとするのは左翼小児病である。はっきり敵であるとわかっているもの以外に対しては、飛躍のためのあらゆる援助と支援がなされなければならない。しかるに、数十年前日の丸の旗の下で、あの戦中を生き抜いてきた親たちのことを、我々は"どうせ世代が違うのだから"と云ってなおざりにしてはいなかっただろうか。親と自分との間に、真の人間関係を築こうとしてどれほどの努力をしただろうか。親として子を思えば思うほど、世間流の幸福から遠ざかってゆく我が子を見て、いたたまれない気持ちになるのは、親の立場からすれば当然であろう。人生経験の豊かな親にとって、自分の人生観だけが絶対であり、ゆるぎないもののように見えるのも、又当然であるかも知れない。しかし、我々は知っているのだ。自分たちのしてきた苦労に本当の真理がないことを、親たちは無意識の中でわかっているのだということを。人類を解放するための斗いに苦しんだのではなく、人類をイヤイヤ乍らにせよ抑圧してきたとの苦しみであったことを、親たちはわかっているのだ。何故なら、親たちはいつも我々に言うのである。「私たちのような苦労だけはさせたくない。」と。

階級形成とは、苦しんでいる全ての人間の立場にたち、一緒になってその苦しみをのりこえる努力をすることに他ならない。権力と我々との間にだって、各方面からのさまざまな誹謗を一身にうけている我々の親兄弟姉妹も又同様である。親兄弟姉妹の深い悲しみと苦しみをわかろうとしないだけでなく、今すぐ敵か味方かと迫るような小心翼々たる態度は、革命家には無縁である。我々は、親のために、兄弟姉妹のために、そして劣等感と絶望感にうちひしがれた幾百万人民のために斗うのだということを、いかなる状況のもとであろうと、つねに心に思いおこさねばならない。同志殺しに象徴されたものであることが明らかになってからも、なお銃げき戦の中に革命性を見い出さんとする、全国の心ある同志たち、友人たちに応えること、そして、仲間に殺された無念の同志たちを心から追悼することは、当然にも一つである。即ち、我々自身が人民の魂にひびきわたる真の共産主義政治を獲得することであり、より具体的には、まず我々自身の団結の内味を総点検し、その作業をおし進める中から、新しい武装斗争のスタイルを確立することであると考える。

この間、獄中の同志諸兄姉より、「銃げき戦の展開時における、家族対策がなおざりにされていたのではないか。」というような内容の指摘が相ついであった。私たちは、これについて充分成し切れなかった。この自己批判と、今后、このような問題をどのようにして解決してゆくのかを考え、より的確な活動をしてゆきたいと思い

ます。私たちが家族の方々と話していく内に、非常に困難に思ったことは、家族に対する、とりわけ父親の社会的基盤に対する权力の圧力でした。これは有形無形のあらゆる形態をとって家族を脅かし、あさま山荘への「呼びかけ」を、自分たちの息子がいるかもしれない、という推測の段階ですら行わざるを得なかった。又、私たちも家族の経済基盤をなくすような危険を押してまでも、「呼びかけ」を阻止することはできなかった。家族の方々も、自らの思想を否定することなく、むしろ、積極的にかかわり、現場の呼びかけでも、「私は、あなたを信じている。……ここをあなたの死に場所と決めたからには、りっぱに死んでほしい。」という主旨の内容で、話されている。しかし、权力は、これすらも口封じし、放送を中止させ、一晩がかりで、「説得」した上、翌日は全く違った内容で話させている。わたしたちは、家族の方々を事前に安全な場所へ移し、保障するということはできなかった。これは、深く自己批判しなければならない。しかし、今后の問題として考えるならば、家族をいかにして、私たち総体のものとするのか、であり、通常よりの私たちの親に接する時の内実を、基本としつつ、それの横のつながりとして、家族会が設定されると考えます。ですから、家族会は、過渡期の形態として、設定されるとは思いますが、現在的には、個人として接し切れない場合を、同様の立場にある家族との会話は成立するという事を考えられ、かなり重要視する必要があると思います。今后は、家族会を強固なものにしてゆくと同時に、私たち赤色救援会と家族会を包括するものとしたいと考えます。又、獄内外を問わず、家族に対する接し方を再度、検討し、長期戦になることは当然ながら、あえて、獄内外の戦士諸兄姉に、協力（家族会へ住所などを送る、など）を、訴えます。

## 絆 第一号（革命戦士 家族会 機関紙）

—抜すい—

病は、大病であればある程、その原因をできる限り科学的方法で り出し、科学的精神と愛をもって、根本的に直さねば、必ず再発するものである。支配权力は、連合赤軍を批判する力も資格も持っていない。かつて、戦前の日本帝国主ギは、自らの日本資本主ギ経済のゆきづまりを、何百万の日本人民、アジア人民の犠牲の上に、第二次世界大戦をひき起こし、南京二〇万人民の大虐殺、朝鮮人民の大虐殺の上に解決しようとした。そうして、世界中を荒廃へと追いやり、日本人民を米帝の屈辱たる支配下へ陥し入れた。そうして今日、政府・資本家は又、米帝国主ギの手先として、又、自らの資本主ギ経済のゆきづまりを解消するために、ますます日本人民を搾取し、自衛隊の強化と資本の海外侵略という形で、かっての誤りを再び犯そうとしている。彼らに、連合赤軍の誤りを正す能力はない。彼らは、それ以上の犯罪を、今も犯しつづけているのだから。警察・国家权力の手で、この問題が解決されるなどという期待をもつのはやめよう。娘・息子・兄弟たちを、唯信じるとはいわない。そうすることはまちがいであることを、今回の事態は、イヤという程、私たちに指し示した。娘・息子たちの革命という事業は、ただ彼らだけのものではないのです。私たちのものでもあるのです。彼らを支持するだけではだめです。自らの部署で斗うと同時に、彼らの斗い方に誤りがあれば正していこう。戦士たちは、私たち家族の声を人民の声として、耳を傾けるべきです。そしてそれに応えてほしい。革命戦士の成長は、わたしたちの成長とわけがたく結びついています。お互いに影響しあっているし、又、そうあるべきなのです。

今回の連合赤軍の事態の中には、わたしたち家族を震感させたものがあります。「革命のためには、家族も何もないのか。」という疑問です。そして、それが共産主ギというものかということです。レーニンや、金日成は母の愛に強く支えられて、革命運動を続けた。そしてその愛に、彼らはいつも応えようとしていた。もちろん、彼ら母子の愛は、狭い利己主ギ的な家族愛ではなかったけれども、子を思う親の愛を、彼らは共産主ギの名のもとに否定したことはなかった。夫婦・兄弟姉妹も、同じです。

共産主ギは、家族愛を否定しない。むしろ、強めるものだと信じます。

☆血縁的・家族的愛の絆を踏まえつつ、それをこえた人民愛の絆を！☆

# 人民の斗いに学ぼう！

革命運動発展の鉄則は、「広はんな人民の支持」をえることであり、これが、今、われ〱に一番問われている問題である。たしかに、われ〱はそのために一生けん命斗ってきた。しかし、連合赤軍の斗いと敗北に、象徴的にあらわれたように、われ〱の「武装」と「団結」は、あまりにも一人よがりであった。われ〱は、目を広げなければならない。三里塚・忍草・沖縄・水俣など、勇敢に斗っている多くの人々に大いに学び、真剣に考えなければならない。そして、われ〱は、このような人々と一丸になって、「人民の斗いとは何か」、「人民の武装とは何か」・「人民の軍隊とは何か」ということを考え、人民の創造的な斗いの中から、豊かな共産主ぎ政治をみちびき出さなければならない。「人民の武装」の問題を、「人民の軍隊」として体現せんと斗い、敗北していった連合赤軍の人々を忘れず、「人民の暴力」奪還の歴史をわすれず、武装斗争の道をつき進むことがわれ〱の任務である。いま、連合赤軍の同志殺しに端を発し、われ〱の戦線は非常な混乱に陥り、武装斗争に失望して戦列から脱落したり、斗いを放棄したりしていく人々がいる。しかし、三里塚・忍草・沖縄・水俣などで斗っている人々は、決して自らの斗いを放棄することはないであろう。なぜならば、自分がどのような所に生まれ、育ち、そして生きてきたかを、斗いの出発点としているからであり、抑圧される者としての階級性に目ざめているからである。われ〱は、自らの階級性を、より多くの人民の生きた斗いに触れる中から、身につけるべきである。現在、日本階級斗争においては、人民の暴力、即ち、人民の武装や抵抗の概念はいちじるしく歪められたものとして存在している。しかし、日本人民は扎る手段を駆使し、自らを武装して国家権力と斗った経験があるのだ。この事実を、はっきりと確認し、われ〱は日本人民の魂の叫びとしての武装斗争の伝統を、うけつがねばならない。オ一に、日本人民は、自らの生産手段、即ち、斧・鎌・くわ・竹槍、そして農具までをも武器に代えた。生産手段の武器化は、生産過程にいる人民だけの特技であり、それ故に、最も強固な武器となり得るのである。こうした農民の斗いの知恵は、現在英雄的に斗っている三里塚や、忍草の農民にひきつがれている。オ二に、敵の武器を奪い取り、自らの武器とした。この見事な例は、城中の銃一万八千挺を、田畑あらしの猪狩りのためと称して、ことごとく奪い取った久留米の百姓一揆や、自由民権運動に見ることができる。オ三に、彼らは、自らの手で武器を作った。百姓一揆の竹槍や石投げ器、加波山における爆弾製造がそれである。日本人民が、はじめて自らの手で武器を作り、人民の斗いを組織された軍隊として編成し、権力の軍隊と「革命」の旗を翻しながら、英雄的に斗った自由民権運動を、日本階級斗争の画期を切り開いたものとして、われ〱ははっきりと教訓化しなければならない。オ四に、彼らは、敵の中に味方を作り、あるいはスパイをもぐりこませることによって敵を内部から攪乱させた。その例は、飯田事件であり、幕末の草莽ゲリラである。オ五に、彼らは、武装した人民を軍隊として組織した。その例は、秩父蜂起や、百姓一揆など数多くあるだろう。——しかしこうした高度の質をもつ人民の斗いは、確かに、地域的規模では一定程度の勝利的展開をしながらも、ついに、全人民のものになることなく敗北していった。その原因は、全国の運動を集中し、確実に敵を打倒する組織された党と軍がなかったということである。自由民権運動もそうだった。そして戦后、階級斗争の敗北過程がそうである。われ〱は、人民がもく〱と斗い、次々にその斗いの質を高度化させ、りこうになっていったにも拘らず、ここで遅れていたのは党であり、社会主ぎ者・共産主ぎ者であったということを、はっきり確認しておかなければならない。

従って、このように、着実に一歩〱前進する日本階級斗争の歴史を、人民の偉大な斗いを真に教訓化することが、われ〱の進むべき道である。この間のわれ〱の斗いが、余りにも一人よがりであったことをきびしく反省し、人民に学び、人民と一丸になって、人民の武装の正当性を防衛し、武装斗争への広はんな人民の参加をかちとっていかなければならない。

豊かな共産主ぎ政治を、身につけ、全人民の団結のもとに、人民の戦争——武装斗争の土壌を創出せよ！

いま、達成しなければならないのは、武装斗争の必要を、人民が、自ら発見することである！

# 全軍労二支部、ストライキ続行、断乎支持！

全ての兄弟たち、支持者の皆さん。沖縄全軍労は、合理化攻げき粉砕を、直接的契机としつつ、日本帝国主義の沖縄返還政策を粉砕する斗いを、三月六日、無期限ストライキで、沖縄百万人民の最先頭に立って決起した。日帝のアジア侵略反革命戦争へ名実共に登場するものとして沖縄「返還」協定のペテン的締結により、のり切り、沖縄返環政策に基づくものとして、沖縄自衛隊派兵への野望があるのであり、その日帝の野望とまっ向から対決し、粉砕するものとして、沖縄人民の決起があるのである。

米帝のアジア帝国主義軍事支配体制は、ベトナム人民を先頭にする全アジア人民の英雄的斗いの前に崩壊し混乱しているのであり、その手直しとして、ニクソン、ドクトリンの政策があり、「アジア人とアジア人を斗わす」ことにより、アジア帝国主義軍事支配体制を崩壊の危机から、延命せんともくろんだわけであるが、ベトナム人民の更なる追げきの前に、ニクソン・ドクトリンは破産を宣言されたのである。日帝は、高度成長の結果として、経済的危机——インフレ状態、を、のり切るためと、且つ、ニクソン・ドクトリンの破産の中で、主客の要素が複合的にからみあい、不可避的にアジア帝国主ギ軍事支配を補完するものとして、日帝が侵略反革命として公然と登場してきたのである。沖縄は、戦后二六年間、米帝と日帝によって二重の抑圧のもとにおかれていた。日本資本主ギは、自ら資本主義としての再建と、帝国主ギへの発展のため、沖縄を米帝に売りわたし、沖縄を根拠地とした、米帝のアジア帝国主ギ軍事支配体制の中で成長してきたのである。沖縄人民は、これらに対する斗いとして、反戦・反安保・反核・本土復帰の斗いとして展開してきた。その本土復帰自体、問題があるのではあるが、日帝の「本土復帰」とは、本質的に全然ちがう路線である。それらの斗いを、社会党・人民党をのりこえた斗いとして、全軍労を始めとする沖縄人民が、米兵との緊張関係の中で、非妥協的な斗いとして、展開しているのである。4月11日において、全軍労二役は、米帝・日帝の前に屈服した。人民の斗いを裏切った。だがしかし、牧港・ミルクプラント再支部の斗いは、全軍労中央の日和見主ギを弾劾し粉砕しつつ、更なる階級的地平へ向け、進げきしている。折りから、ベトナム人民の英雄的大攻勢が、インドシナ半島で展開されている。かかる中にこそ、プロレタリア国際主ギが生きているのだ。ベトナム——沖縄を結ぶ赤い糸！プロレタリア国際主ギで貫かれている。

# 沖縄全軍労二支部スト続行支持！断乎支持！

# M公判近況報告

☆、穂積満　仙台拘置所在監　判決5年　控訴中

四六年六月二日、逮捕以来、判決まで約10ヶ月もの間、接見禁止のまま警察署に拘置、裁判が進行され、一切音信不通であったが、今年の三月以降、接禁がとけ、先日はじめて元気な便りが届いた。この間の情報を一切たたれながらも、控訴して奮斗する穂積戦士に人民の斗いの息吹と励ましの便りを送ろう。

（住所）仙台市古城二の三の一

☆、藤沢良吉　東京拘置所在監　判決3年六ヶ月

三月二九日検事控訴　三月藤沢控訴

三月二九日の検事控訴は、敵权力のファッショ性である。かかる報復攻げきを許すな

[redacted]、出獄する。

---

四六年一〇月六日、下獄した神田戦士が、四月六日出獄いたしました。現在、実家にて、養生中。出獄万才

## ——訂正——

本紙八号に、誤りの個所がありましたので、次の如く訂正いたします。（とばして書いていた）……

二頁目の中ほど、「連合赤軍の斗いと敗北、そしてその誤りは、七〇年代の具体的な革命戦争へ、転化・飛躍させるための生みの苦しみであった。

——中略——人民のみなさんの批判を仰ぎ、徹底して自己批判せねばならない。その自己批判を、徹底してやり切るため——中略——人民の言葉で人民の生活を守り、人民の権利を獲得せんと前進する赤軍派・日本共産党革命左派の人々……